

# 第4回分科会活動報告

日時：2011年10月20日（木）～21日（金）

場所：20日：同志社大学 寒梅館、21日：富士通(株) 京都支社

出席者：48名（内訳：正会員16名、賛助会員他：32名）

記録者：日本大学理工学部 惠藤 浩朗（第一分科会運営委員長）

テーマ：PBL、IR

## 1. 配布資料

- (1) 2011年度第4回第一分科会プログラム
- (2) 2011年度第4回第一分科会出欠名簿
- (3) 講演資料「PBLで学生は変わる！社会が変わる！」
- (4) 参考資料「同志社大学のプロジェクト学習（Project-Based Learning）」
- (5) 受講生報告資料「スポーツイベント開催！学生と地域の連携によるスポーツクラブ」
- (6) 受講生報告資料「京都の織物文化活性化計画」
- (7) パンフレット「社会の教育力を同志社大学へ！」
- (8) パンフレット「PBL推進支援センター通信」
- (9) パンフレット「2009年度プロジェクト科目学生成果報告書」
- (10) 講演資料「大学教育の質保証と教学IR～学びの実態の可視化を通じて」
- (11) 参考論文「大学生における学習スタイルの違いと学習成果」
- (12) 懇親会会場のご案内

## 2. 研究活動内容

【20日 午後】

- (1) 全体会 13:30～13:40

- a. 開会の挨拶
- b. 事務局より連絡

- (2) ご講演 第一部 13:40～14:40

テーマ：「PBLで学生は変わる！社会が変わる！」

講演者：同志社大学 文学部 教授、PBL推進センター センター長 山田氏

同志社大学では他大学に先駆けて8年間PBLに関する取り組みを実施しており、これまでに関連する課題でGPに3回採択されています。今回のご講演では、そのPBLの具体的な内容とその成果とPBLを実践した学生達の成績評価方法などについて、ご講演いただきました。

まず同志社大学では、社会連携型の課外活動としてPBLがスタートし、それを正課の科目として認めるため「全学共通教養教育科目の整備」としてプロジェクト科目が設置されることになりました。

この科目は学年問わず受講可能で1年間に250名程度が受講する人気の科目で、PBLの



課題は毎年 70 件程度の応募から 25 件前後に絞り込んでいるそうです。PBL の一つの例として、テキストを作成するという課題で、学生が「この PBL の目標はテキストを作るのではなく、そのテキストを使ってもらうことです」と答えたという話を聞いたとき、このプロジェクト科目の成果は学生だと改めて思いました。また PBL は、その内容や形態が様々であることから成績評価が難しいという話をよく伺います。そこで今回はその成績評価基準や評価方法などについても山田氏にお話を伺いました。まずこのプロジェクト科目では、常々自己モニタリングのために学習履歴の記録、自己管理、自己評価を記述させ、それを公開させているそうです。そして日々の自己評価から学生自身が自己を振り返るというプロセスを経て、学生は最終的な自己評価を行います。そして最終的な成績評価は、その自己評価を用いるそうです。ここで「あまり積極的でない学生が高い評価を受けることがあるのでは？」と疑いたくなりますが、山田氏によると学生主体の成績会議、客観的な活動記録評価、議事録、企画書、各種報告書、成果物などについてワークショップで取っているアンケート結果、第三者評価、動的観察の結果と学生自身の自己評価の間には、かなりの相関があるということでした。これには学生達がプロジェクト科目に真剣に向き合い活動している表れではないかと感心してしまいました。

(3) ご講演 第二部 14:50～15:20

テーマ：受講生報告

a. 「スポーツイベント開催！学生と地域の連携によるスポーツクラブ」

スポーツを通じた学生と地域の連携を目的として「ブシドー☆キッズ」という企画を実施する PBL を紹介していただきました。そしてこの PBL を通して仲間とのコミュニケーションの大切さや、企業との関わりを通して礼儀作法、リスクマネジメントの必要性など多くのことを学んだと話してくれました。

b. 「京都の織物文化活性化計画」

せっかく京都にいるから京都らしいプロジェクトを実施したいということで、織物文化を活性化させる PBL に取組まれた事例を紹介していただきました。まず錦織物の厳しい現実についての調査を実施され、それを解決するためにフリーペーパーやカレンダーを作成し、広く織物文化の素晴らしさを知ってもらえたら活性化するのではないかとといった具体的な動きや、これから半年間で何ができるのかといった今後の方針について熱心に説明していただきました。



(4) 意見交換会 15:30～16:30

ファシリテータ：山田氏

意見交換会では山田氏の講演された PBL の成績評価方法についての確認と、その具体的な内容について詳しく伺うと共に、PBL を実施したことにより学生は様々な社会人基礎力ともいべき力を身につけられたと思うが、その成果は就職活動などで生きたのかといったことが問いかけられました。学生からは確かに役に立つ所があったと回答していただきましたが、山田氏は「良心を手腕に運用する人物を出さん」という同志社大学発起人 新島襄の

言葉をもとに「これは就職のための活動ではない」とのお答えをいただきました。さすがは同志社大学です。また意見交換会中の学生達の質問に対する受け答えが完璧で目を見張りました。やはりこういった質疑一つを取っても、学生が自分達自身で課題に取り組んでいるから、自らの言葉で適切に受け答えできるのだと感心しました。

(5) 施設見学 16:30~17:00

分科会を実施した同志社大学 寒梅館にて、マルチメディア対応会議室や PC コーナー、学生支援センター、キャリアセンター、建設工事の際に行った遺跡調査で発見された室町時代の遺構・遺物などの施設見学を行いました。寒梅館の最上階からは建造中の同志社大学今出川新棟を上から見せて頂き、将来的にそれが学生の自習室やラーニング・コモンズとしても利用されるとのお話を伺いました。またここは五山の送り火の大文字焼きを正面に望める絶好の観覧スポットでした。

(6) 懇親会 18:30~

【21日 午前】

(7) 全体会 9:00~9:10

- a. 開会の挨拶
- b. 事務局より連絡

(8) ご講演 9:10~10:20

テーマ：「大学教育の質保証と教学 IR~学びの実態の可視化を通じて」

講演者：立命館大学 教育開発推進機構 教授 鳥居氏

分科会 2 日目のご講演では暗黙知や経験則に頼るものではなく、IR (Institutional Research) を通じて教育に関するデータや情報を分析し、より実効性のある改善策に結び付ける取組みを紹介頂きました。具体的な内容を記述します。米国のほとんどの大学では IR 室の機能を保持しており、特に FD に関する専門部署で IR についての調査・提言をしているケースが多い。そこで立命館大学でも学長直下に教育開発推進機構を組織し、その下に教育開発支援センターとして IR に取組まれている。2009 年より教学改善の意思決定に資するデータの収集、分析、報告を通じて大学の「学びのコミュニティ」の成長を支援するといったプロジェクトが始まり、鳥居氏は「今、学部は何を知りたいか」を尋ね、過去にどのようなアンケート調査などを実施してきたかを洗い出し、必要に応じて調査を行い、それに基づき何度も基礎データと教務データのクロス集計を行うことで様々な分析を実施されました。例えば「上級生の外国語の運用能力が低いのはなぜか？」といった問いに対し、カリキュラムマップを作成し確認することで外国語教科が低学年に集中しているなどの仮説が立て、様々なデータから検証して学科へフィードバックするといった活動や、単なる成績評価ではなく学習スタイルと学習成果の関係から成長を可視化することで多角的に評価し、どのような講義を実施すればより効果的な講義が行えるかなどの助言もされているといったお話を伺いました。



2009 年より教学改善の意思決定に資するデータの収集、分析、報告を通じて大学の「学びのコミュニティ」の成長を支援するといったプロジェクトが始まり、鳥居氏は「今、学部は何を知りたいか」を尋ね、過去にどのようなアンケート調査などを実施してきたかを洗い出し、必要に応じて調査を行い、それに基づき何度も基礎データと教務データのクロス集計を行うことで様々な分析を実施されました。例えば「上級生の外国語の運用能力が低いのはなぜか？」といった問いに対し、カリキュラムマップを作成し確認することで外国語教科が低学年に集中しているなどの仮説が立て、様々なデータから検証して学科へフィードバックするといった活動や、単なる成績評価ではなく学習スタイルと学習成果の関係から成長を可視化することで多角的に評価し、どのような講義を実施すればより効果的な講義が行えるかなどの助言もされているといったお話を伺いました。

(9) 意見交換会 10:30～11:30

ファシリテータ：恵藤

まず IR が未だ日本で定着していない理由はといった問いに対し、鳥居氏は IR が安定的に機能するためには情報基盤が重要だが、その情報基盤が弱いという所が日本で定着していない理由で、データベースがリレーショナルであれば IR は進むと回答されていました。また、このような取組みはなかなか外圧だけでは進まず、内部の大学関係者が気が付き、対応していく必要があるとおっしゃっていました。特にアメリカでは専門職（スペシャリスト）として IR を教育の水際に設置しており、日本ではそれは職員が適しているとの話でした。その理由は、教員は流動的で属人的に物を進めるとその教員が他大学などへ移動した際に機能なくなるためといった内容でした。そしてあくまでも教員はリサーチベース、コンセプトメイキングを担当した方が良くとおっしゃっていました。また最後に IR を実施することは、GPA や学業成績だけでなく多面的に正しく学生を評価することにも十分利用可能であるとのお話を伺いました。

【21日 午後】

(10) オプションプログラム 13:30～15:00

(株)内田洋行 フューチャークラスルームの見学

分科会終了後、第二分科会と合同のオプションプログラムとしてフューチャークラスルーム（大阪）の見学会を実施しました。具体的には実際にフューチャークラスルームで「PF-note」や「codemari」、調光可能な LED 照明、3 面マルチスクリーン、「eB-S」などを紹介していただきました。また他大学のアクティブラーニングの導入事例やユビキタス協創広場 CANVAS の見学なども実施しました。



3. まとめ

今回、2 日間におよぶ分科会でご講演いただいた 2 件は、我々が良く困る「PBL の評価」や「学び実態可視化」といった学ぶべき点の多い内容であったかと思えます。初日の同志社大学では他大学に先駆けて PBL を実践されてきただけのことがあり、とてもハイレベルで多岐に渡った PBL が実践されており、PBL 自身ではなく、PBL をどう評価するかといったフェーズの研究に取り組まれていることに驚きました。また 2 日目の立命館大学では、従来まで簡易的なアンケートや暗黙知、経験則をもとに対策していた問題に対し、大学が所有する情報やデータをフル活用して、理論的に説得力ある結果として提示されていたことに対して、これが IR の凄さなのかと感動しました。そして 2 日目午後のオプションプログラムで訪れたユビキタス協創広場 CANVAS では、是非こんな施設や設備を利用して分科会を実施したいと思い、早速、事務局へ次年度の分科会で内田洋行の施設を利用できないか調べていただくようお願いしてしまったほど、素晴らしい施設を見学できました。

以上